

知的障害児教育における言語活動モデルの構築

竹尾勇太（福岡教育大学教育学部 講師）

I 本研究の目的と背景

現行の学習指導要領では、言語は各教科の学習を支える基盤とされているが、知的障害児の多くは言語面で多様な困難を示す。言語には発声・発話、読み書き、語彙、文法、コミュニケーションなどの領域があり、それぞれに課題が見られる。加えて、言語の社会的機能の理解も重要である。本研究では、幅広い発達段階にある知的障害児を対象に、言語領域と言語機能に基づいた言語活動モデルの構築を目指した。

II 研究内容

1. 実態調査

教師が、学校教育の中で知的障害児の言語に関する困難をどのように捉えているか明らかにするための調査を行なった。その結果、教師は言語領域のコミュニケーションと言語機能における自己理解のような自分自身と関わるためのことばの使用に、それぞれ最も困難を感じる傾向にあった。さらに因子分析の結果、教師の捉えは内的言語能力と外的言語能力の2因子に分けられた。これらから、知的障害児における場面や文脈の理解困難によって、学校では対人関係上の問題が表面化しやすいと考えられた。また言語機能では、過去の経験や行動を振り返る際の内省的な言語の適切な使用に困難があると考えられた。さらに因子分析によって2因子が抽出されたことから、知的障害児の言語を内的または外的という少なくともこの二つの観点から捉えることは、子どもの言語実態を効果的かつ効率的に把握でき、教育場面においても有用であると考えられた。

2. 言語活動の例

(1) 国語（国語をコアとした教科横断的な取組）

言語領域の語彙・文法とコミュニケーション、言語機能の「経験を整理するためのことば」に着目し、「きもちのことば」の習得を図った。まず美術の授業で、生徒自身が気持ちを可視化するキャラクターを作成した。模範例を見た後、自由に画材を使い、自己の感情を表現する活動を行った。次に国語の授業で自作の「きもちのキャラクター」を使って様々な場面での感情を考える活動を行った。身近な題材により、生徒は自分の気持ちを積極的に表現していた。最後に、より日常生活の中で活用できるよう、毎日の宿題で取り組んでいる日誌の活動にも気持ちの振り返りの活動を取り入れ、般化を図った。

(2) 体育（教科の特性を活かした取組）

言語領域の語彙、言語機能の「自分自身と関わるためのことば」に着目し、ダンスをする際の動作に関する語彙や他者と伝え合う力の向上を図った。ダンスの練習を行う際、自分たちの練習の様子を撮影し、練習に入る前に、自分ができるようになりたいと決めた体の動きについて分析した。この時、オノマトペ等を用いることで、動作のイメージとそれに対応することばが結びつきやすくなるよう工夫した。動画や手本カード、体の部位や動きに関する言語表現の視覚化によって、生徒が伝えたい内容に対してより自らの力で思考し、伝えようとする姿勢が目立った。言語活動を取り入れることで、教科の目標である資質・能力に深く迫ることができた。

III まとめ

本研究で取り組んだ一連の調査および実践の結果を踏まえ、知的障害児教育における言語活動モデルを提案する（右図）。言語活動の実践を通じて、複数の側面に同時に働きかけることが、知的障害児の生活に即した言語能力の育成により効果的であった。本研究でも多くの実践で複数の言語領域や言語機能を結果的に扱っており、その点からも両者の補完的関係が示唆される。言語活動をとおして子どもの言語能力を育みたいと考えるとき、その本質は「言語を教えること」ではなく、言語機能の整理や思考力、判断力、表現力との兼ね合いを考慮した活動設定が重要であることも明らかになった。

